

山口大学多言語化プロジェクトの現状と課題 —Language Exchange プログラム《 Tandem 》を中心に—

山 本 冴 里

要旨

山口大学では、2012年10月初旬より Language Exchange プログラム《 Tandem 》を実施している。本稿では、このプログラムが山口大学多言語化プロジェクトの一環であることを述べたうえで、《 Tandem 》のシステムと参加者について詳述した。また、活動評価アンケートの結果についてまとめた。アンケートの結果からは、参加者の多くが《 Tandem 》に満足していることが明らかになったが、更に人的リソースを活かしていくこと・学内に多言語を学ぶ「意識」を形成していくことといった今後の課題も浮かびあがってきた。

キーワード

Tandem, Language Exchange, 多言語化, 交換学習, Moodle

1 はじめに

本稿では、山口大学における Language Exchange プログラム《 Tandem 》の経過報告を行う。このプログラムは2012年10月初旬に開始し、執筆時点で開始からほぼ3ヶ月が経過している。

《 Tandem 》とは二人乗りの自転車を意味するが、言語教育・学習の分野においては、母語や熟達言語の異なる2人が、ペアで互いの言語学習を手助けするシステムを言う。

こうした言語学習の支え合いは、自然発生的に古くから行われてきたものと考えられるが、教育システムとしての制度化は、1800年代初頭に、英国で行われたものを嚆矢とする（Calvert, 1992）。現在では広く採用されており、日本国内の高等教育機関においても、すでに大阪大学・獨協大学・早稲田大学・筑波大学・東京大学などで同種の試みが行われている¹⁾。

報告者が山口大学に《 Tandem 》を導入したきっかけは、大きく分けて2点ある。

1点目は、2012年春学期に担当した留学

生を対象とする日本語クラスで、学生達が学内の100名にアンケートを採った結果として、「互いの言語を学び合う」プログラムが必要だ、という趣旨のレポートを提出してきたことである。こうした希望が見られる以上、教職員の側で何らかのシステムを作るべきだと感じられた。

2点目のきっかけは、たまたま漏れ聞いた日本人学生達の会話であった。休み時間にロビーで話していた彼らの脇を通りすぎた。

「アメリカ人はいいよな。こんな苦勞しないんだよな」「最強じゃん」——思わずひき返し、もういちど傍を通った。「アメリカ人って、ちょっとラテン語とか、やるくらいなんでしょ？」

宿題なのだろう。彼らは英語のプリントを広げていた。「ネイティブっていいよな。がんばらなくても英語、話せるんだもんな」

言語教育の一端を担う者として、こうした学生達に言いたいことは沢山あった。それはたとえば「アメリカ人」だからといって英語の母語話者（ネイティブ・スピーカー）とは

限らないということであったり、「ちょっとラテン語とか、やるくらい」という現状認識に対する批判であったりする。しかしさらに深刻に感じられたのは、この話をしていた学生達にとってはおそらく、外語学習といえば英語なのであり²⁾、他の言語の価値については殆ど意識したこともないだろうということであった。

むろん報告者は、話していた彼らの傍を通り過ぎ、幾つかの言葉を耳に挟んだだけであり、受けた印象は実は間違っていたのかもしれない。しかし、山口大学が近く共通教育課程での初習外国語クラス廃止を予定していることや、その一方で TOEIC 関係科目を充実させつつあることなどから、学生達には、大学が「英語こそが重要であり英語以外の言語は軽視してかまわない」というメタ・メッセージを出しているときえ受け取られかねないことも懸念された。

報告者は、むろん英語学習が有用であるということに強く同意する。しかし同時に、高等教育機関の多言語化は極めて重要になると考えている。というのもそれは、我々が異質な文化に対してどのような姿勢をとるのかという問いに関わるし、多言語化は、市場主義的な理由・道具的言語観による単一言語主義的な態度を緩和する役割をも果たすからだ。

こうした認識から、報告者は、2012 年秋学期より、山口大学多言語化プロジェクトを始めた。本稿で報告する「Tandem」も、その一環としてシステム化したものである。

次節では、山口大学多言語化プロジェクトについて、まず概要を記したい。

2 山口大学多言語化プロジェクト

山口大学多言語化プロジェクト（略称：言の葉プロジェクト）は、文字通り山口大学を多言語化していこうという試みである。具体的には、学内に多言語を学ぶ意識・技術・環境を作っていくことを目標とした（図 1）。

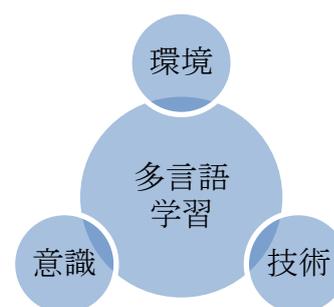


図1 山口大学多言語化プロジェクト

報告者はこのプロジェクトのためにロゴを作成し、日・中・韓・独・仏・タイ語の 6 言語でポスターも作った。ここでは、ポスターの例として日本語版を挙げる（図 2）。他／多言語でのポスターは日本語版ポスターとペアにした状態で各学部へ送付され、掲示された。



図2 山大多言語化プロジェクト（言の葉プロジェクト）ポスター

ポスターに図案化した植物の葉には、「言の葉」、すなわち言葉という意味を含み持た

せたつもりである。山口大学に在籍している限り、学生達は少なくとも日本語・英語は使える／学んでいるはずである。これが図2中の大きな2枚の葉だ。それに加えて、もう1言語（これが3枚目の小さな葉だ）の学びに踏み出してみませんか、という誘いをこめた。

ポスターの日本語版には「言の葉、何枚ありますか」と書いたが、この部分の表現は言語によって異なる。いずれも各言語の熟達者に相談しながらメッセージの文言を決定した。

次に、山口大学に存在する多言語学習リソースを調査した。具体的には、総合図書館の協力を得て、多言語学習の手助けになるリソースを把握した。表1は、現在共通教育課程で教えられている中・韓・独・仏語の書籍数および視聴覚資料の数をまとめたものである。表1から、どの言語も圧倒的に視聴覚資料が足りないということは明らかだ。また、この4言語のなかでは、韓国語関連の書籍が際立って少ない。

表1 総合図書館配置の多言語学習リソース

	書 籍		視聴覚資料
	言語学習用	一般	
中国語	762	16,556	1
韓国語	160	186	3
独語	794	16,823	0
仏語	366	4,343	0

こうした物的リソースを充実させていくことは今後の課題であると考え、それには予算も必要となる。そこで当面は1) 人的リソースの活用と、2) 多言語学習の意識化とを試みることにした。前者が結びついたのが「Tandem」であり、後者はワークショップの形で実施することとした。

ワークショップは、「言語学習の理論と実践」として、2012年10月下旬より、学内において報告者が隔週で実施している。予約

不要・1回のみ参加可としており、本稿執筆時点ですでに4回が終了した。毎回、参加者は10人に満たないが、こうした事柄には時間が必要だとも思われるので、「Tandem」の運営と並行して、今後も続けていきたい。

次項では、本学における「Tandem」のシステムと参加者について詳述する。

3 山口大学における「Tandem」

3.1 山口大学における「Tandem」の仕組み

「Tandem」はペアという形が基本であるため、たとえば「日本語学習を手助けするのでパンジャビ語を手伝ってほしい」と言ったところで、「パンジャビ語学習を手助けするので日本語学習を手伝ってほしい」というパートナーを見つけられなければ、成立しない。

したがって、山口大学における人的リソースの有無は「Tandem」のシステムを考えていくうえで、絶対に考慮に入れなければならない要素だということになる。

そこで、山口大学における日本語・英語以外の話者数を把握することが必要になるのだが、言語レポーター調査はこれまで行われていないため、2012年3月1日現在での留学生在籍数と彼らの出身国および出身国の国語・公用語から、各言語の話者数を推定した。その結果、10名以上の話者が山口大学に在籍していると推定される言語は、多い順に中国語・マレー語・インドネシア語・韓国語・ベトナム語・ベンガル語・タイ語であった（表2）。

表2 10人以上の話者が在籍する言語（推定）

中国語	141	ベトナム語	15
マレー語	38	ベンガル語	14
インドネシア語	31	タイ語	13
韓国語	25		

上の調査から明らかになったのは、2012年度まで共通教育課程で教えられている——すなわち学習希望者が多いだろうと予想される中・韓・独・仏語のうち、中・韓に関しては一定の話者が在籍しているが、独・仏に関しては話者の在籍は殆ど無いということであった。2012年3月1日時点での留学生在籍者のうち、独語話者として推定されるのは1名、仏語話者として推定されるのは2名にすぎなかったからである。

そこで、独・仏語に関しては、ドイツやフランスで日本語を学んでいる学生達とペアを組ませ、インターネット上でSkype等のアプリケーションを用いて学習させる可能性をさぐった。

あいにく独語については本稿執筆時点で協力校を見つけることができていないが、仏語に関しては、フランスのリール第三大学日本学科の協力を得て、同大学で日本語を学んでいる学生達とペアを組ませることができた。

「Tandem」参加者を募るにあたっては、おおむね以下の方法を採用した。

- 学内各所のポスター（図3）で募集
- 2回の説明会の開催
- 留学生を対象とした担当授業での告知

また、日本人学生を対象とした言語関係授業を担当している先生方の幾人かにも協力をあおぎ、授業の際に「Tandem」システムの開始を告知していただいた。

こうした形で募集をすすめる一方、社会的構築主義の考え方に基づいて作られた授業・自律学習支援ソフトウェアであるMoodleを利用して、インターネットサイト「他／多言語への目覚め—タンデム学習」を開設した³⁾。ここでは、学習したい言語・学習を手伝いたい言語・学習可能時間などを記した登録用紙（巻末資料1）のダウンロード・アップロー



図3 《Tandem》参加者募集ポスター

ドができる。

同サイトでは、掲示版の機能を用いて言語学習に関する質問や相談も受けつけている。同サイトを回覧する動機づけになるよう、また言語学習を手助けできるようにと、言語ごとに、辞書サイトや学習支援サイトへのリンクも貼った。

登録学生のペア組み合わせは、本稿報告者が決定した。具体的には学習したい言語と学習を手伝いたい言語の組み合わせが合致する者のうち、登録日時が早い順に学習可能時間帯を確認し、ペアを組んだ。

次に、昼休みを利用してペアとなる2人を研究室に呼び、パートナーとなる人の連絡先や、「Tandem」を開始するにあたっての約束事項を伝えた。約束事項とは、次のようなものである。

- 「Tandem」はチューターやアルバイトではなく相互支援であるため、どち

らかに負担や利益が偏らないようにすること

- 何らかの事情でペアを解消するときは両者から解消理由を報告すること
- ノートを一冊用意して「Tandem」学習日誌をつけること。内容は、日時・学習内容・うまくいったこと・うまくいかなかったこと・次回の予定など

以上より、一般的に「Tandem」システムを利用してのペア学習の登録～開始は次の道をたどることになった⁴⁾。

1. ポスターを見て／教員にすすめられて説明会に参加
↓
2. インターネットサイト「他／他言語への目覚め—タンデム学習」から、登録用紙をダウンロード。記入して同サイト上にアップロード。
↓
3. 教員（本稿報告者）からの連絡を受けて研究室へ。ペアになる人と顔合わせ。約束事項について説明を受ける。
↓
4. ペア学習開始

3.2 山口大学における「Tandem」の現状

「Tandem」の第1回説明会は、2012年10月23日に開催した。その後約2ヶ月が過ぎて、2012年12月21日現在での登録者は47名に達している。これは、大学全体の人数からいえば極めてわずかなものにすぎないが、登録者が40名を超えた頃から、数人ではあるものの「友達に聴いて興味を持ったから」など、口コミを理由とする登録者も現れはじめ、少しずつ、学内での知名度も上がってきているものと思われる。

この登録者47名のうち、日本人学生は24名、留学生は22名、外国人教員が1名である。登

録者に顕著な特徴を以下にまとめた。

<登録者属性>

- 日本人学生の80%以上が女子学生である（女性21名、男性3名）
- 留学生・外国人教員は70%以上が男性である（女性6名、男性17名）
- 日本人学生は全員が学部学生であり、なおかつ1年生が70パーセント以上を占める（1年生17人、2年生5人、3年生0人、4年生2人）
- 一方、留学生は研究生・大学院生が過半数を占める。

<学習希望言語>

次に、登録時の学習希望言語について日本人学生、留学生・外国人教員の別にまとめる。

表3 登録時の学習希望言語（日本人学生24名）

英	韓	仏	独	中	他	計
19	6	4	3	3	1	36

表4 登録時の学習希望言語（留学生・外国人教員23名）

日	英	韓	中	仏	計
23	4	3	1	1	32

登録者の中には、複数の言語の学習を希望していた人がいるため、表3-4の合計欄にはその延べ人数を記した。

表3を見ると、まず、日本人学生24名のうち19名（約80%）が英語学習での登録を希望していることがわかる。第2節に述べたとおり「Tandem」は山口大学多言語化プロジェクトの一環であるため、説明会の折などには英語よりもむしろ他／多言語の学習機会の提供という点に力を入れたつもりである。しかし蓋を開けてみれば、英語での希望者が大多数を占めていたことになる。

表3からはまた、英語以外での学習希望言

語が、ほぼ韓・仏・独・中国語に限られていたということも明らかになった。これは共通教育課程で提供されている4言語であるため、共通教育課程での授業がある程度言語学習の動機付けに繋がっていたことが推定される。

一方、表4の留学生・外国人教員による学習希望言語を見ると、日本語の希望者数は登録者総数と一致している。すなわち、留学生および外国人教員の登録者は全員、日本語学習を（あるいは、それにあわせて他言語学習を）希望していたのである。

表中には掲載していないが、さらに細かく見ていくと、留学生・外国人教員のうち日本語以外の学習を希望している者は、留学生センター開講の日本語授業全5レベルのうち4レベル以上を受講している者に限られていたことがわかった。留学生はまず「Tandem」に日本語学習支援を望み、中級後半以上のレベルに達してはじめて他言語の学習を希望していたということになる。

次に、登録者が何語の学習を手伝えると申し出ていたのかということについてまとめる。

まず、日本人学生の場合には、全員が日本語学習のみを手伝えると申し出ている。日本語とあわせて他の言語をも手伝えるとした学生は皆無であった。

表5 登録時に学習を手伝えるとした言語（留学生・外国人学生）

中+日	韓+日	ベトナム語+日	英+日	インドネシア語+英
2	2	1	1	2
ベンガル語+英	ペルシヤ語+英	ネパール語+英	仏+英	スペイン語+英
3	2	1	1	1
韓のみ		英のみ		中のみ
3		2		1

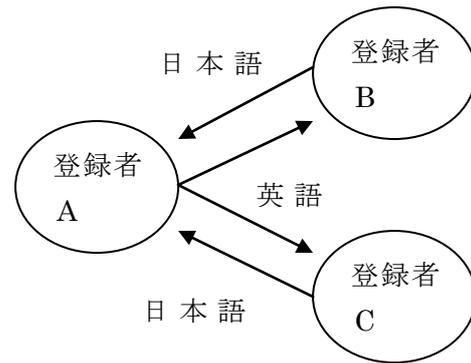


図4 複数の言語パートナーを持つ例

それに対して、留学生・外国人教員の場合は、約60%が2言語以上の学習を手伝えるとしていた（表5）。その2言語とは、母語および日本語か、母語および英語であった。

以上が登録者に関する情報であり、2012年末時点での登録者計47名のうち、41名の活動が始まっている。基本的には、ペアは1対1であるが、中には、2～3人のパートナーを持つ者（図4）も含まれる。

以下では、2012年末現在でのペア作成状況について報告する。前述のように、この時点でペアを持つ者は41名である。1人も言語パートナーを持たない6名について、そのペア不成立理由を挙げると、独語のみを希望言語として登録している（1名）・一週間のうちで1時間しか「Tandem」に使える時間帯が無く、その時間帯に合致するパートナーが見つけれない（1名）・登録はしたもの実際の学習開始は2013年1月以降を希望（1名）などとなっている。

<ペア作成状況>

登録からペア決定の連絡まで、数時間で終わられる場合もあったが、ドイツ語-日本語でのペア学習を希望した例のように、登録から2カ月を経て、いまだ言語パートナーを紹介できていない例もある。登録から言語パートナー紹介までの平均的な所要時間は1週間

程度である。

表 3-5 を一見して明らかである通り、必ずしも「学習を手伝ってほしい言語」と「学習を手伝いたい言語」という需要と供給が1対1で対応しているわけではない。ペアが成立した言語の組み合わせのうち最多のものは、日本人学生が留学生の日本語学習を手伝い、留学生が日本人学生の英語学習を手伝うというパターンである。

また、留学生のうち日本語レベルが高い2名（いずれも正規の学部留学生）は、日本人学生と同様に他の留学生の日本語学習を支援し、その代わりに英語学習を支えてもらっている。

英語－日本語での言語交換を行っているペアは、延べ数で16組にのぼる（図4の例の場合には2組と数える）。

その他の言語学習の組み合わせは、フランス語－日本語が5組（ペアの相手はすべてリール第三大学学生）、韓国語－日本語が3組、中国語－日本語が2組である。いずれにおいても、ペアの片方は、パートナーの日本語学習を手伝っているということになる（表6）。

表 6 交換学習の対象言語と成立ペア数

日本語	英語	16
	フランス語	5
	韓国語	3
	中国語	2
計		26

次節では、登録票およびペア成立者に対するアンケートの結果から、彼らが何を目的として「Tandem」に登録し、自身の活動をどのように評価しているかということについて記したい。

4 「Tandem」登録理由と活動評価

4.1 登録理由

「Tandem」登録票には、登録理由を記す箇所がある。留学生の場合には、日常で日本語に困難を感じているからという切実なもの、あるいは漠然と「もっと上手になりたい」というものが多いが、日本人学生の登録理由は、もう少しバラエティがある。

本節では、日本人学生による登録理由を中心に、複数名が挙げていたものを報告するが、「スキルの向上」「上手になりたい」といった漠然としたものは省略した。

- 短期語学研修への参加／留学を希望している（6名）
- 留学した後に、留学先で使っていた言語を用いる機会が減少した（3名）
- 日本語を教えてみたい（2名）
- 外国人の友達が欲しい（4名）
- 生身の「ネイティブ」の発音を聴きたい（2名）

こうした登録理由からは、短期語学研修や留学への参加が、言語学習の大きな動機付けとなっていることがうかがえる。

4.2 活動評価

2012年2月20日～27日の一週間で、ペア告知後一ヶ月以上を経過していた31名を対象に、活動評価アンケートを実施した。アンケートの言語には、日本語・英語の両言語を用いたが（巻末に資料2として日本語版を添付）、おそらくは年末ということもあって、回収率は約45.2%（回答者14名）と高くない。

今後も定期的にこの種のアンケートを重ねていく予定であるが、開始後間もない現時点での記録も残しておくことが重要と考え、幾つかの項目での結果についてここに報告する。

<頻度と時間>

「Tandem」のセッションは、基本的には週に1度・1～2時間としているが、ペア間で互いに相談のうえ、増やしても減らしても良いこととしていた。アンケートの結果、回答者のすべてが週に1度のセッションを行っていることがわかった。1度のセッションは1時間程度の者がちょうど半数、それより多いという者が半数であり、それより少ないという者は見られなかった。

＜パートナーとの関係＞

パートナーとの関係については、「とてもうまくいっている」という者、「まあまあうまくいっている」という者がそれぞれ半数を占め、「あまりうまくいっていない」「全然うまくいっていない」という者は皆無だった。

一方で、互いの助け合いのバランスについては、「相手に手伝ってもらっている時間のほうが長い」あるいは「相手を手伝っている時間のほうが長い」とした者が相当数にのぼっていることも明らかになった（図5）。

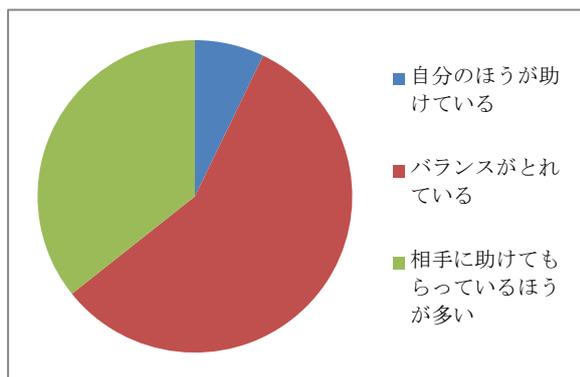


図5 互いの助け合いのバランス

＜「Tandem」の有用性＞

自身の言語学習に対して有用かどうかという点と、パートナーの言語学習に対して有用だと思われるかどうかという2点を尋ねた。自身の言語学習への有用性に関して高い満足度が得られていることと（図6）、パートナーの言語学習に対してもそれなりに有効だと

考えていること（図7）が明らかになった。

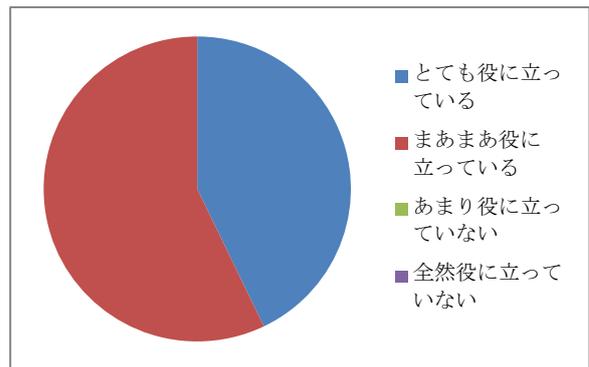


図6 自身の学習に対する有用性

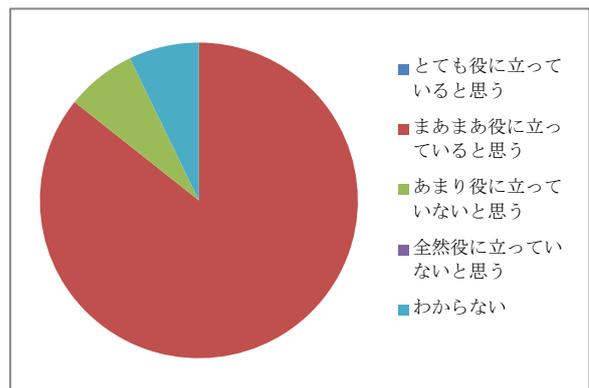


図7 パートナーの学習に対する有用性

また、有用性について、どうしてそのように感じるのかを自由記述で尋ねたところ、とても／まあまあ役に立っているとした者の多くが、「freely」あるいは「friendly」に、あるいは「casual way」で話せること、そして「先生に聞きにくい」質問でもできることといった、親近性を挙げていた。

一方で、「自分は相手の学習にあまり役に立っていないと思う」とした者（1名）が挙げていた「役に立たなさ」の理由は、自分と相手のレベル差（自分のレベルが低いこと）であった。

＜他言語学習への希望＞

「Tandem」を行っている言語のほかに、パートナーは何語ができるかということと、「Tandem」を用いてさらに他の言語の学習

をも希望するかということを探ねた。

パートナーの言語レポーターについては、多くが「わからない」あるいは「《Tandem》で手伝ってくれている言語のほかには何もできない」という答であったが、「アフガニスタン語」という者が1名いた⁶⁾。またパートナーが留学生で、日本語学習を手伝ってもらっている2名に限っては、その留学生の母語を挙げていた。

《Tandem》を用いてさらに他の言語の学習をも希望するかという点については、答はまちまちであったが、登録時からの変化は見られなかった。

<システム改善のための提案>

自由記述で「《Tandem》のシステム改善のための提案や《Tandem》に関する悩みなどがあれば、何でも、書いてください」と求めた。

まず、悩みとしては「テキストが無い分、『どうして学びたいのか』ということや『やりたいこと』が自分自身の中で明確になっていないと難しい」という回答があった。

おそらくは同様の理由により、システム改善のための提案として、教員にそれぞれのレベルに合った学習素材を提示してほしいという意見も見られた(2名)。

また、教員による supervision や guide, evaluation があつたほうが良いという回答も複数寄せられた(4名)。

なお、学習素材提示あるいは supervision 等を求める回答は、すべて英語でのアンケート回答者に限られていたため、おそらくは留学生の意見であったものと思われる。

5 まとめと今後の課題

本稿では2012年10月初旬に開始し、本稿執筆時点で開始からほぼ3ヶ月が経過した、山口大学における Language Exchange プログラム—《Tandem》の経過報告を行った。

具体的には、《Tandem》が山口大学多言語化プロジェクト(略称:言の葉プロジェクト)の一環であることを述べたうえで、システムと登録者・参加者について詳述した。また、彼らの登録理由および活動評価についてまとめた。

報告者はここ数カ月に渡り《Tandem》のオーガナイズを担当し、一定の手ごたえを感じている。そのことは、アンケート結果に見られた高い満足感からも裏づけられたと思われるが、その一方で、幾つかの課題も感じている。以下、3点に分けて課題を記したい。

● 他/多言語を学ぶ「意識」の形成

最大の課題と思われるのが、《Tandem》への参加を、他/多言語の意識化と結びつけていくことである。

3.2項の表5で挙げたように、留学生の登録者のほとんどが、2言語以上の学習支援が可能であるとしていた。にもかかわらず、ペアの間では、ターゲット言語(ほとんどは英語)以外の言語については、あまり話題にのぼらないのだろう。4.2項で報告したように「《Tandem》で手伝ってくれている言語のほかに、パートナーは何語ができるか」という問いに関しては、多くが「わからない」・「《Tandem》で手伝ってくれている言語のほかに何もない」答えていた。

唯一の例外が、自分は英語学習を手伝うことになっているが、ベンガル語も教えているという自由記述欄への回答であり、この回答者のパートナーと報告者が個人的に話したところ、「英語でベンガル語について説明してくれている。そのことがとても面白い」という反応であった。そこでは、英語を媒介として他言語(ベンガル語)への意識が広がっていると言えるのかもしれない。そして、その点では、《Tandem》は山口大学多言語化プロジェクトの一環としての役割を果たしたということになる。

留学生の出身地と「Tandem」登録者出身地とを引き比べた時に気づくのは、東南アジア出身者の少なさである。表2に記したように山口大学には多くのマレー語・タイ語話者がいるが、いずれの言語話者も登録していない。インドネシア語・ベンガル語・ベトナム語の場合には登録者こそいるものの、彼らが実際に学習を手伝っている言語は、英語あるいは日本語なのである。

タイ語話者などは潜在的な登録者（タイ語を学びたいという人が出てくれば登録してくれるだろうと思われる）と考えられ、今後、学内に多言語を学ぶ意識・技術・それを可能にする環境を作っていくためには、こうした人的リソースを活かしていくことが重要になる。

したがって、まずは、学内で英・韓・中・独・仏語に限らず、上述のような言語も学べるのだということや、こうした言語にも大きな価値があるのだということの周知が——すなわち他／多言語を学ぶ「意識」を形成していくことが、今後の課題になるとと思われる。

● ドイツの大学との提携

反対に、すでに学びたいという需要があるにも関わらず人的リソースの不足によりペアが組めないという状況にあるのが、独語学習を希望した場合である。

仏語の場合においてリール第三大学と協力することができたように、独語の場合にも、いずれかの大学の日本学科と協力関係が成立するよう、努力していきたい。

● システムの改善

4.2で報告したように、教員による学習素材の提示やguideを求める参加者はそれなりの数にのぼっていた。

とはいえ、現状、報告者は「Tandem」のペア引き合わせや説明、相談への対処にかなりの時間を割かれている。今後、登録者が増

えていくだろうことも勘案すると、各ペアに個別に丁寧につき添っていくことは、難しい。しかし何らかの対応が望まれるのは確かであるため、集団的なワークショップなどの形で、一層のサポートを考えていきたい。

(留学生センター 講師)

【参考文献】

福地恭子, 2011, 「初級スペイン語授業におけるE-メール・タンデム学習 — 沖縄国際大学スペイン語クラスとレオン大学日本語クラスとの交流」『沖縄国際大学総合学術研究紀要』第14号, 37-59.

脇坂真彩子, 2012, 「対面式タンデム学習の互恵性が学習者オートノミーを高めるプロセス—日本語学習者と英語学習者のケース・スタディ」『阪大日本語研究』第24巻, 75-102.

山本冨里, 2010, 「「外国語」に対して「母国語」 - 「母語」の位置関係にある「X語」の提案 — フランス語の *langue étrangère* 概念を足場として」『リテラシーズ』7, 21-29.

Calvert, M, 1992, Working together: Peddling an old idea. *Language Learning Journal*, 6, 17-19.

【注】

- 1) 日本で行われた「Tandem」学習に関する研究・報告としては、福地（2011）、脇坂（2012）などがある。
- 2) 外語は外国語の誤記ではない。敢えて外語と書く理由については、山本（2010）に記した。
- 3) Moodleの日本語版公式サイトは <<https://moodle.org/course/view.php?id=14>>（2013年1月9日）。山口大学のMoodleログインは <<http://www.cc.yamaguchi->

- u.ac.jp/guides/moodle/> (2013年1月9日)から。本文中に報告した「Tandem」のサイトには、山口大学のID・パスワードおよび登録キー tandem を入力することで使用できる。
- 4) インターネットを利用して実施する仏語—日本語での「Tandem」の場合、顔合わせはできなかったが、リール第三大学側担当者と綿密な打ち合わせを行い、リール第三大学の学生達と同じ学習日誌のフォーマットを用いた。
 - 5) また、留学生・外国人教員のうち韓国語学習を希望していた3名はすべて中国大陸あるいは台湾の出身であった。
 - 6) しかし、本稿報告者の知るかぎり「アフガニスタン語」という言語は存在しない。
- アフガニスタンでは、パシュトー語、ダリー語（ペルシャ語）など複数の言語が用いられている。
- 7) 「Tandem」のペア作成は、シビアな需要と供給によって決定していくという要素を免れ得ない。そこでは、留学生のなかでは言語リソースの中に英語を持つ者が圧倒的に強く、最も容易にペアを見つけることができる。ところで、中でも高い価値を置かれやすい英語の母語話者には、実は1名しか「Tandem」への参加がない。本稿報告者の知る限りのその他の英語母語話者は、学内で英語を教えるアルバイトをしている。良くも悪しくも、英語にはそうした高い市場価値—商品価値が付随する。

【資料】

資料1 《 Tandem 》登録用紙（見本）（※部分はパートナー引きあわせの際に公開）

基本情報													
ふりがな	やまくち ことば		立場(※)	<input checked="" type="radio"/> 学生 <input type="radio"/> 教員 <input type="radio"/> 事務職員									
名前	山口 言葉		学生の場合(※)	学部			修士			博士			他
ニックネーム(※)	やまこ			1	2	3	1	2	3	1	2	3	
電話番号	090-1234-5678		学部 学科名(※)	工学部									
大学のメールアドレス yamaguchi-kotoba@yamaguchi-u.ac.jp			その他のよく使うメールアドレス			yamaguchi-kotoba@hotmail.com							
自宅に インターネットに接続できるコンピューターを持っていますか？										ある	はい	いいえ	
は、近日に持つつもりですか？													
希望の曜日・時間帯を教えてください。(Tandemは、そのうちのどこか1～2時間/週になります)				(火)曜日	19:00～21:00								
				(金)曜日	21:00～23:30								
				(土)曜日	7:00～10:00								
言語能力情報(※)													
	言語名			A1	A2	B1	B2	C1	C2	資格など(あれば)			
1	日本語			読む									
				聴く									
				話す									
				書く									
2	英語			読む							TOEIC 〇〇点		
				聴く									
				話す									
				書く									
3	ドイツ語			読む									
				聴く									
				話す									
				書く									
「言語学習の理論と実際」ワークショップ(水曜14:30～16:00 共通教育棟13番教室)に・・・													
<input checked="" type="checkbox"/>	参加している／参加してみたい												
<input type="checkbox"/>	参加するつもりはない												
<input type="checkbox"/>	そんなクラスがあることを知らなかった												
<Tandem>で提供したい言語(※)													
日本語													
<Tandem>で学びたい言語と学習歴(※)													
ドイツ語(大学に入ってから、1週間に4コマ。2年間)・英語(中学～大学2年まで)													
<Tandem>に登録したい理由													
……から。													
趣味・出身地など、言語パートナー探しにあたってのアピール(※)													
趣味は旅行と料理です。山口市の岩国出身で、家の近くに、錦帯橋というとてもきれいな橋があります。世界中に旅行してみたいです！ ドイツには、去年、一週間だけ行ったことがあります。													
山大多言語化プロジェクト(言の葉プロジェクト)に関して、ボランティアの手助けが必要になった場合、もしご都合があれば、お手伝いいただけますか？										はい	<input checked="" type="radio"/> いいえ		
お名前・電話番号・メールアドレスを除いた情報は、Tandem制度を良くすることを目的とした研究において、用いることがあります。そのことを、了承していただけますか？										<input checked="" type="radio"/> はい	いいえ		
										2012年	10月	10日	
										署名	山口 言葉		

資料2 《 Tandem 》活動評価アンケート（日本語版）

1 性別 女性 男性

2 学年 一年生 二年生 三年生 四年生 修士1年 修士2年 ほか

3 Tandemで学んでいる言語は何ですか。
 英語 日本語 中国語 韓国語 フランス語 ほか

4 その言語を、授業でも学んでいますか／学んでいましたか
 学んでいた 学んでいる 学んでいない

5 Tandemで学習を手伝っている言語は何ですか。
 英語 日本語 中国語 韓国語 フランス語 ほか

7 Tandemのパートナーの人と、どのくらいの頻度で会っていますか。
 もっと少ない 2週に1度 1週に1度 1週に2度 もっと多い

8 その頻度について、どう考えていますか。
 もっと少ないほうがいい ちょうどいい もっと多いほうがいい

9 Tandemの1セッションの長さは、基本的には1時間としていますが、あなたのペアでは、どのくらいですか。
 もっと少ない 1時間程度 もっと多い

10 その長さについて、どう考えていますか。
 もっと短いほうがいい ちょうどいい もっと長いほうがいい

11 Tandemで、言葉の学びを手伝っている時間と、手伝ってもらっている時間は、バランスがとれていますか。
 手伝っている時間のほうが長い
 大体バランスがとれている
 手伝ってもらっている時間のほうが長い

12 パートナーとの人間関係は、うまくいっていますか。
 とてもうまくいっている
 まあまあうまくいっている
 あまりうまくいっていない
 全然うまくいっていない

13 Tandemのセッションは、ご自分の言語学習のために、役に立っていると思いますか。
 とても役に立っていると思う
 まあまあ役に立っていると思う
 あまり役に立っていないと思う
 全然役に立っていないと思う

14 どのような点で、役に立っている／役に立っていないと思いますか。（自由記述）

15 Tandemのセッションは、パートナーの言語学習のために、役に立っていると思いますか。
 とても役に立っていると思う
 まあまあ役に立っていると思う
 あまり役に立っていないと思う
 全然役に立っていないと思う

16 どのような点で、役に立っている／役に立っていないと思いますか。（自由記述）

15 あなたのパートナーは、Tandemで手伝ってくれている言語の他に、何語ができますか。（自由記述）

16 Tandemで他の言葉も学びたいですか。
 学びたい とくに学びたくはない

17 「学びたい」にチェックした方にうかがいます。その場合、何語が学びたいですか。（自由記述）

18 その他、Tandemのシステム改善のための提案やTandemに関する悩みなどがあれば、何でも、書いてください（自由記述）